

2017年6月18日(日)

説教:「主の光の中を歩もう」

聖書:イザヤ書2:4~5

昨日、「恨之碑追悼会」がもたれた。「恨之碑」とは、先の戦争で日本軍が朝鮮半島侵略した際に 120 万人以上と言われる朝鮮の方々を強制連行した。男は兵士し激戦地に送り込まれ、女は慰安婦として日本兵の性の奴隷として利用された。沖縄戦にも 3000 人余りの方々が送り込まれたと記録にある。そして大勢の方々がこの沖縄戦で亡くなった。追悼式はその強制連行された朝鮮の方々を覚え追悼式を行い、私たちが追悼を込めてゴスペルを歌った。最初に仏式で追悼のお経が読まれた後、キリストのゴスペルが歌われていくという形で進む。教会の集まりを越えて地域の方々と出会って行く。宗教をも越えて、心ひとつに祈りを合わせて行く。私たちが平和を叫ぶ新たな方法として大事にしていきたい。

今朝の聖書は、戦争の悲劇、歴史を通して語られた預言者の言葉である。繰り返し行なわれる人間の争い、戦争を通して生まれた戒めと教訓の言葉として記されている。命を殺す「剣」や「槍」を打ち直して「鋤」や「鎌」をつくるという言葉には、三つの意味がある。一、「鋤」や「鎌」は、命を「耕し、守る」ための道具、すなわち生命を育み、支え、守る道具であるということ。二、「剣」や「槍」を打ち直して「鋤」や「鎌」をつくるのは、心と体を使う、想像力を必要とする取り組みである。三、何よりも愛と平和、信仰と希望がそこにはある。

「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」とは何を言っているのか？今を生きる私たちが、この箇所を聞くとすれば、こういうことではないか。すなわち、「ヤコブの家よ」とは、「キリストと共にある者よ」であり、「主の光の中を歩もう」とは、「主の言葉に生きよう」と言うことであろう。その「主の言葉に生きよう」とは、キリスト者同士で生きよ、ということではなく、人々と共に、地域の方々と共に、民衆と共に生きよと言っているのであり、それは悪魔化して行く権力に、国家におもねることなく、ひるむことなく、人々と共に、民衆と共に、平和を叫び、平和を築くこと。「剣を鋤に、槍を鎌に」変えるということは、民衆と共にという意味が込められている。

そしてキリスト者は、「主の光の中を歩」時、その光に照らされて、自分の影に気づかされ、弱さが、罪が、露わにされて行く者。自ずと悔い改めと謙虚さを身に着けて、歩むべき道が見出されて行くものであろう。キリストの平和は、そのようにして生まれてくるのではないか。(神谷)